



TITLE:

計画1-4 中国地方の野生ニホンザルの分布と個体群の動態(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

上田, 丞; 林, 勝治; 田中, 浩; 村田, 満; 吉岡, 龍太郎;
村崎, 修二; 小村, 洋子

CITATION:

上田, 丞 ...[et al]. 計画1-4 中国地方の野生ニホンザルの分布と個体群の動態(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1991, 21: 53-54

ISSUE DATE:

1991-09-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/164279>

RIGHT:

団の存在を示唆する未確認の情報があるのみであった。本調査では両地域における分布状況を把握することを目的とした。

錦町を中心とする一帯では大平川の東岸の尾根の温迫峠を行動域の東限とし、西は曲がり谷一帯をその西限としている大平グループと、曲がり谷から藤尾谷を東限として吉市段塔町に現れる段塔グループの2集団が見いだされた。

大平グループはこれまでの目視によるカウントでは30頭を越えないけれどもその実数は60頭以上と思われる。熊本県下全域で猿害を起こしていないのはこのグループのみである。町当局もこの状態を守るために大平山山系の国有林伐採反対の陳情を営林署に行い続けている。というのも、錦町は熊本県有数の梨の栽培地であって、人里には梨園が連なっているからである。

段塔グループは昔からいたようで今は廃校となった段塔小学校にもしばしば姿を見せていたといわれているが、今では国道221号線沿いの人吉市大畑町柴笠に現れるだけではなく、国道を越えて大畑町小河内や大野溪谷近くまで出没して被害を起こしている。グループの個体数はこれまでの観察やVTRの記録から判断すると大平グループよりは少なく、30～40頭と推定される。

球磨村では中国川と小川に挟まれる地域に大槻グループが生息していたが、今回の調査で、中国川周辺への出没が急減し、代わって、人吉市上原町馬水や尾曲での椎茸に対する猿害の急増と、同時に2km離れた馬水と尾曲に集団が現れていたことが確認されて2グループの存在が判明した。

大槻グループはその個体数は60頭以上の大きさであるが、もう一つはこれまでの観察例から約20～30頭の小さな集団でその行動域は小川下流と馬水、尾曲である。このグループは最初の発見地名をとって糸原グループと命名する。

計画1-3:

ニホンザルの分布と個体数と生息環境—群馬県奥多野地区および霧積・妙義山系における調査研究

上原貴夫(長野県短大)

群馬県奥多野地区とは一般的に多野郡上野村、中里村、万場町周辺をさす。群馬県南西部にあたり、天丸山、二子山などの稜線をはさんで埼玉県秩父郡と接する。全体として山容は急峻であるが広葉樹林も多く残されている。しかし、杉、カラ

マツなどの植林も行なわれている。

野生ニホンザルはこの地域としては上野村に多く生息、遊動している。その主な地域は西から品塩山北面を中心とした中ノ沢一帯、神流川沿いの浜平およびその上流部、中里村との境界近くの野栗沢一帯である。個体数の確認は山も深く、人家も少なく従って目撃報告等も少ないため困難が伴なう。そのため、実際の観察や聞き取り調査に加えて食痕、糞塊等の生活痕による推定も含めると、先の中ノ沢周辺では20～25個体が遊動している。主な遊動域は、品塩山北面からマムシ岳南面の神流川の支流の一つである日向沢、カマガ沢、猿巻沢等に沿った地域であり、時には中ノ沢の集落から三岐の集落にかけて遊動する。浜平から上流の神流川沿いにかけてはやはり20～25個体が遊動する。野栗沢においては埼玉県境に近い上流部にかけて30～40個体が遊動している。これらの群れは、冬から春先にかけて主に集落近くを遊動し、夏から秋にかけては山中を遊動するという特徴を持っている。この他に、離れザルの目撃が、中里村一帯から万場町の中里村境近くにかけての一帯において報告されている。奥多野地区においては、特に野栗沢一帯を中心として埼玉県境を越えた秩父における野生ザルとの関連が窮える。霧積・妙義山系においては依然として山を降りる傾向が続くとともに、新たな地域への出没もあらわれてきている。特に、霧積山系では本来の生息地である山中で減少し、一部が長野県軽井沢町に定着するとともに、群馬県側においては山麓の集落地に多くの野生ザルが遊動する現象となってきている。これには山中における高速道路や高圧鉄塔、新幹線工事などが影響していると考えられる。両山系では更に新たなゴルフ場開発などが予定されている。また、猿害対策も有害鳥獣駆除隊員の増員などによって強化され、野生ニホンザルの生息は一段と厳しい状況となっている。

計画1-4:

中国地方の野生ニホンザルの分布と個体群の動態

上田 丞・林 勝治(宇部短大)

田中 浩(大津高)

村田 満(三田尻女子高)

吉岡龍太郎(下松工業高)

村崎修二(猿舞座)

小村洋子(益田高)

今年度はアンケート法により広島県の野生ニホンザルの群れ（10頭以上の集団）、小集団（2～9頭の集団）とソリタリーの分布についての調査をした。また島根県および山口県で、アンケート法による調査の検討と群れ数の把握の試みおよび絶滅群の絶滅経過の調査をしてきた。結果および今後の調査要点は次の通りである。

アンケートの結果：広島県の群れ集中地域は、県の西端の佐伯郡、広島市の北側の高田郡と東端ノ神石郡から福山市の北にかけての3ヶ所であった。山口県と島根県の調査結果と同じく広島県においても、小集団およびソリタリーの分布は群れ集中地域外にも広がっていた。

アンケートの検討：島根県邑智郡は20年ほど前から猿害に悩まされてきた。対策として、サルの実態を把握するために、分布や頭数の調査が町村単位で行われてきた。したがって、昨年度のアンケートでは、詳細な回答があった。

群れ数の把握の試み：高校生を中心に昨年から引き続き山口県玖珂郡周辺を調査した。そこに、メスだけの安定したグループが生息していることが分かった。このグループは警戒心が強く、困難な追跡ではあるが継続調査をしている。

絶滅群：広島県では各所で、サルの群れが絶滅または絶滅寸前の状態にある。原因はいずれも捕獲によっていた。例えば、三原市周辺の数群が捕獲により絶滅した。

まとめ：群れ集中地域での群れ数を特定するために、聞き込み調査を試みたが、幾つかの問題があり、今後、一群一群を、テレメーター法等により現地調査することにした。

山口県、島根県と広島県の3県にかけておよそ3000km²の広域な群れ集中地域があった。

広島県内の群れ絶滅は最近のことであり、今ならば捕獲を実施した組織に群れの記録が残っているはずである。この記録の収拾をしたい。

計画1-5：

丹後・丹波高原の野生ニホンザルの分布、ならびに複数群が集中的に分布する地域における群間関係の研究

伊谷原一・黒田末寿・

高畑由起夫・西原智昭（京都大・理）

早木仁成（神戸学院大）

本調査では、京都府丹波・丹後高原の宮津、峰

山、舞鶴、綾部、福知山、園部、京北の各地方において、野生ニホンザル群の分布状況について聞き込み、および直接観察をおこなった。以下に、各地方における野生群の分布域と推定個体数を記す。

宮津：伊根町の権現山を中心に経ヶ岬から蒲入までの海岸道路沿いを遊動する約30頭の群れと、本庄浜から新井までの海岸沿いから西側の内陸部を遊動する25～30頭の群れが確認された。この他に、太鼓山周辺を遊動する30頭前後の群れが1つ分布するらしいが、先の2群との異同は未確認である。

峰山：丹後町の権現山西側の上山で1群確認されたが、これは伊根町の経ヶ岬周辺を遊動する群れと同群と思われる。また、同町の他地域から得られた聞き込み情報は、すべてがヒトリザルであった。

舞鶴：成生地区を中心に40～50頭、水ヶ浦を中心に約50頭の2群が隣接して分布する。また、西大浦から佐波賀にかけて30～40頭、朝来周辺に40～50頭、三国岳西側の多門院から与保呂にかけて40～50頭の計3群が分布する。

綾部：この地方の分布状況の詳細については不明な部分が多いが、故屋岡町を中心に南北12km、東西12kmの範囲に4群、約200頭が生息する。

福知山：烏ヶ岳を中心に遊動する25～30頭の群れが1つ確認された。烏帽子山の北側に1群分布するという情報があるが、未確認である。

園部：和知町・長老ヶ岳の西側を中心に遊動する45～50頭の群れが確認された。また聞き込み情報によると、隣接する日吉町の畑郷周辺と瑞穂町の兜山から西山周辺にかけて、それぞれ30～40頭と30頭前後の群れが1つづつある。

京北：京北町、および美山町では、1～4頭で遊動しているサルが頻繁に観察されたが、大きな群れは確認できなかった。また、聞き込み情報では、美山町の知見周辺と大野周辺にそれぞれ30頭前後の群れが1群づつ、美山鉾山の周辺に約20頭の群れが1つ分布するとのことである。

計画1-6：

近畿圏におけるニホンザルの分布の実態調査
—その2

清水聡・武田庄平・金澤忠博

（大阪大・人間科学）